

特集「近世日本における〈北方〉イメージ」
について：名所絵本『東国名勝志』と元禄
地誌

MASHIMA, Nozomu / 真島, 望

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

16

(開始ページ / Start Page)

254(1)

(終了ページ / End Page)

220(35)

(発行年 / Year)

2019-03-29

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021870>

名所絵本『東国名勝志』と元禄地誌

真 島 望

一 緒言

近世における北方（蝦夷・奥羽）あるいは東国への、中央（幕府・諸藩）が抱く辺境・境界というイメージは、中世的な枠組を継承しつつも、特に現在の北海道以北については、シャクシャインの戦い（寛文九（一六六九）年）や、十八世紀後半の対露問題を経験することで、変化を余儀なくされてきた。

一方で、文学史に目を転ずれば、それらの地域は伝統的にはまず何よりも、エキゾチシズムに満ちた歌枕の地であった。そのイメージもまた近世にも生き続けたことは、能因・西行を慕った芭蕉の奥羽行脚（元禄二（一六八九）年）と、夥しい数にのぼるその追従者の存在が雄弁に物語る。

それでは、より通俗的な民間の文献では、北方・東国のイメージはどのように捉えられていたのだろうか。

大坂の書肆吉文字屋市兵衛編、刊の名所絵本・地誌『東国名勝志』（つきわかせてい月岡雪鼎画、大本五卷五冊、自序、無跋、宝曆十二（一七六二）刊）は、上方から勃興する近世民撰地誌の到達点とも言うべき「名所図会シリーズ」へと連続する、近世地誌史上重要な位置を占めるが、実は絵・文ともに元禄期の地誌・絵図に、その多くを依拠していることが判明する。

本稿では、その依拠資料との関係を明らかにしつつ、近世中期における元禄地誌の転生と、その背景を考察する。また、その分析を通して、当時の民間に見られた「東国」観の側面についても言及したい。

二 『東国名勝志』の概要

『東国名勝志』（以下、『名勝志』と略称）は、これまでに『日本名所風俗図会』⁽¹⁾に翻刻が、『東国名勝志——東国歌枕名所集』⁽²⁾に影印がそれぞれ収められ、いずれにも解題が備わっているが、限定的な記述にとどまるので、まず当該資料の基本的な情報を確認した上で、先行作との関係について検討したい。

書誌 ただし、紙幅の都合上、書誌については簡略に示す。比較的完本に近い形態を維持する国立公文書館内閣文庫蔵本（請求記号一七二一八八）によった。

〔装訂〕 刊本。大本五卷五冊。四針袋綴。〔表紙〕原裝。縦二十七・六×横十九・五糎。熨斗目花色無文様。〔題簽〕原裝。縦十八・八×横四・七糎。浅黄色。子持杵に「東国名勝志 一（一五）」（表紙左肩）。卷一以外は二字目「國」。卷一・四は楷書体、そのほかは行書体（卷三は一部、卷五はすべて剥離のため、一七二一八九本で確認）。〔構成〕卷一：序文（二丁）・本文（十五丁）、卷二：本文（二十二丁）、卷三：本文（十二丁）、卷四：本文（十四丁）、卷五：本文（十三丁）・刊記（最終丁裏）、総計六十六丁。〔序文〕後述。〔匡郭〕四周单边。二十二・三×十六・三糎（卷一本文初丁表）。〔奥付〕卷五最終丁裏に、「寶曆十二年歲春正月／畫工 月岡丹下／彫工 吉見仁右衛門／浪華書林 鳥飼市兵衛／澁川清右衛門／高田清兵衛」。⁽³⁾〔備考〕内題・尾題・跋文は備わらない。卷四には九丁目が無く、それを補うためか「十八」と記す丁が二丁ある（版面・内容の連続は混乱しない）。また、全巻とも十丁目の丁付けを細工する（「十ノ十五」とし、十六と統ける）ことで、実際の紙数よりも分量を多く見せようという意図が感ぜられる。⁽⁴⁾

後年の「板木総目録株帳」（寛政二（一七九〇）改正）に「絵本」と分類される。文化九（一八二二）年改正分になると、板株所有者から吉文字屋市兵衛が姿を消し、「秋良」（秋田屋良助）が加わるので、少なくとも文化期までは商品価値を認められ、実物は未見ながら書肆を異にする後印本が刊行されていた可能性もある。

作者と内容 続いて、鳥飼醉雅による序文を見てみよう。

東国名勝志叙

東方我神州也。百美備れり。夫佳境勝景の多かる。豈筆端の尽すべきにはあらず。就中、城州相坂也、東西の関として是分東を関東といふ。不佞往年東都に遊歴す。其行路中、山川の佳勝・風土の秀異、返り書して旅袖に納め、また故典事跡粗録し置しを、今年月岡錦童の菅城子をもとめて図画に写さる、事を得、尚むさしの、奥を古き好本に考へ、或は其土人に尋て東海の限迄も図画成りぬ。一度巻をひらけば、宛も面下其地に至れる心地して想像にたへざる也。由是、同志の人の為にもと、桜木に寿する事に侍りぬれば、たゞちに其事を序とす。

宝曆十二年

春正月

鳥飼醉雅子印

ここから、序者が即ち編者であること、編者の江戸旅行での見聞がその端緒となっており、それを元に月岡雪鼎に筆をとらせたことなどが確認できる。

鳥飼醉雅は、諸人が指摘することく、書肆吉文字屋市兵衛の三代目に当たる人物で、家業の地歩を固める一方、著作もよくしたことで知られる。絵を担当した月岡雪鼎は、十八世紀後半大坂画壇で活躍した絵師。山本ゆかり氏が、「雪鼎は吉文字屋から多くの版本を刊行し、この書肆が初期の画業を規定してゆくうえで、少なからぬ影響力をもった存在であることが想像される」と指摘されるように、両者の関係は密接であった。同氏はまた、絵本中心のその刊行物の中で、鳥飼醉雅が編者として関わる物が「雪鼎の版本の主要領域を占める」と述べられ、『名勝志』をその一例としている。す

なわち、『名勝志』における編者・画者の組み合わせは、当時吉文字屋刊行物の一つの典型を示していると言うことができよう。

内容については、前掲の序文に、「就^{なかん}中、城州相坂也、東西の関^{せき}として是^{これ}今東を関東といふ」とあり、「東海の限^{しまり}迄^{まで}」描いたと言うから、書名の「東国」とは、逢坂の関（現滋賀県）以東、所謂古来の「関東」（広義）であろうことが推察される。実際に、巻一は蝦夷地・松前から始まり、東山道・奥州道中をたどって、巻二途中より東海道に入って順次上つてゆき、最終巻五は琵琶湖の近江八景を活写して終っている。

毎葉その道中風景や歌枕・名所旧跡を描き、場所にちなむ和歌を添えるが、絵本とすべきと先述したのは、多くは名所の証歌が記されるだけで、地誌的な解説が非常に少ないためである。

三 依拠資料

それでは、具体的に先行作との関係を探ってみよう。東山道各地など江戸以北については、「むさしの、^{おく}ふる^{ふる}古き^{こう}好本^{ほん}」に考^{かん}へ、^{あるひ}或は^と其^{おの}土人^とに尋^{たづね}」（序文）^たと言^いい、参考とした書物の存在を示唆している。翻^かつて^つ江戸以西（東海道）の部は、序に言う通り編者の経験を反映したもののなか。絵と文のそれぞれについて、その具体を検討することとする。

なお、先に記した解題類には、典拠への言及は無く、本書を正面から扱った八木敬一氏の論考^⑩では、『名勝志』の、後続作への影響について貴重な指摘がなされるものの、やはり典拠には触れられていない。

(1) 図様の典拠

北海道文化研究者の北構保男氏は、蝦夷地図の展開を検討する中で、井原西鶴による日本地誌『一目玉鉾』（大本四卷四冊、元禄二（一六八九）年大坂鷹金屋庄左衛門板、以下「玉鉾」と略称することがある）に着目され、『名勝志』所載の蝦夷地・松前

の図は、その影響下にあるうちの「つだ」と述べている⁽¹⁾。あくまでその一図に限っての指摘で、『名勝志』自体を検討対象としてはいないけれども、極めて示唆に富む見解と言うべきである。

ところが、子細に検討すると、『玉鉾』の利用はその一図にとどまらず、巻一・二に描かれる江戸以北の絵については、かなりの程度、『一目玉鉾』の挿絵に拠っており、さらに、東海道に入ってから(巻二・五)は、『東海道分間絵図』(大型折本五巻五帖、遠近道印作・菱川師宣画、元禄三年序刊、以下「分間絵図」と略称)を参照していることが判明した。

『名勝志』の絵は、

- (a) 名所・街道を鳥瞰的視点で描いた遠景図
 (b) 歌の内容や説話を対象とする近景の人物図

の二種に大別でき、この(a)に該当する絵の多くが、元禄期の地誌・絵図を典拠とするということである。

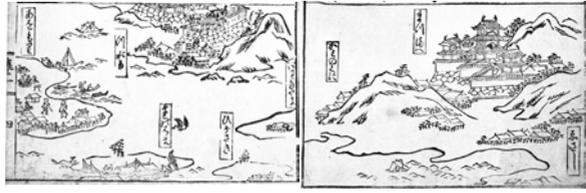
特に巻一の(a)の絵(十五箇中十三箇)はほぼ『一目玉鉾』を下敷きとしたものと言つてよい。巻二以下になると、(b)が占める割合が相対的に上昇するので、巻一の『玉鉾』への依存度の高さは際立っている。実例として松前と平泉の該当部を掲出する(共に巻一、図1・2)。上段が『玉鉾』(挿絵のみ)、下段が『名勝志』である⁽²⁾。

前者を確認すると、概ね津軽半島東岸に比定される外の浜が、あたかも独立した島のように描かれるなど、『玉鉾』の地理認識はややいびつで、『名勝志』はそれをそのままなぞつてはいない(強引に描きこまれる弘前城も削除)けれども、右側の渡島半島⁽³⁾や松前城の位置・形状などはほぼ踏襲されていると言えるだろう。

後者平泉も、北上川を画面手前に配し、衣川を奥の山間に置く構図や山々の形状・点在する住居の図様などに加えて、それぞれの地名の書入れも「とみのやま・さかしば山」以外はすべて『名勝志』に合致するほか、北上川にせり出した「いそさき」の表現も共通している。

両者の図様の一致の程度を知るため、ここでさらに同種の別資料を参照すべきだが、後に述べるように、現北海道地

図1 松前
『玉鉾』巻一



『名勝志』巻一



も『玉鉾』に近いことがわかるだろう。

続いて『分間絵図』利用の例を見てみよう。こちらも上段が『分間絵図』、下段が『名勝志』である。⁽¹⁵⁾

図4は川崎の宿を描いた箇所、多摩川にかかる橋(六郷のはし)を中心に描き、画面上部に遠景の富士山と大山を

域を描く絵図は類型化が甚だしい上に、平面的に表現された地図様のものであり、江戸以北を対象とする道中記も、東海道や中山道と異なり、そもそも絶対数が乏しい。まして、『名勝志』のごとき、俯瞰的・鳥瞰的視点を有する連続図はさらに稀で、宝暦までに一般に流布したもので、『玉鉾』以外にはほほ例を見ないのである。

例外的に、盛岡藩の『増補行程記』(写本、清水秋全著、寛延四(一七五二)序)⁽¹⁴⁾のように、外部の者が容易に参看できなかったであろう街道絵図には、奥州道中筋を魅力的に描いた作品が存在する。藩主の命によって成されたこの絵図は、それゆえに正確性を期したことが推察され、その平泉部分(図3)と比較するに、例えば、北上川と衣川の関係(画面左上、その合流が描かれる)を見れば、二つの川を全く別に描く『名勝志』が、実景より

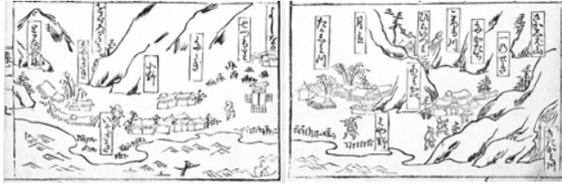


図2 平泉
『玉銚』巻一



『名勝志』巻一



図3 『増補行程記』坤巻(盛岡市中央公民館蔵)

図4 川崎
『分間絵図』巻一



『名勝志』巻二



の一特色であって(例えば『玉鉾』の同箇所は、そのどちらにも表現されない)、それが『名勝志』にも見られるのは偶然の一致ではあるまい。

ただし、六郷・川崎間にかかる橋は、元禄年間に廃止されており、元禄期に刊行された『分間絵図』⁽¹⁷⁾はともかくも、

並べる構図が一致し、街道の湾曲具合なども『分間絵図』を踏襲している。実用性を重視するがゆえ、本書は「街道の並木や一里塚、また富士山やその他の山並み、名所・旧跡・寺社などいづれも、それぞれが実際の所在やその景観通りに描くもの」⁽¹⁸⁾であり、その曲直は刊本の体裁上の制約を受けてデイフォルメがなされているにせよ、道路の形状や山並みは、その正確性を反映したこの資料

図5 大井川

『分間絵図』巻三



『名勝志』巻三



それを無批判に写した『名勝志』は実景として正確とはいえない。難く、編者の参府を反映する(序文)にしては杜撰である(逆に言えば、元禄以前の資料を参看した証とはなる)。

図5はどうだろうか。言わずと知れた東海道の難所を描いたもので、周囲の山肌の表現や本流と傍流の描き分けが一致する(『玉鉾』には両者ともなし)。とりわけ、川を渡る人々の表現に注目したい。本流上部に徒歩渡りを書いて、中段に綱を用いて貴顕の輿を渡す人足の様子を描写し、下段に馬での渡河を配す『分

間絵図』に対し、『名勝志』は下段に肩を貸す人足を加えるほかは、これに倣っているとと言えるだろう。
川崎宿・大井川いづれの場面でも、検証・一致した諸特徴は、『分間絵図』の先蹤たる『東海道細見図』(寛文二(一六六二)刊)や『東海道駅路図』(元禄元(二六八八)以前刊)に見出すことができず、それは、『分間絵図』以後に夥しく刊行された道

中記も同様である。⁽¹⁸⁾とりわけ、川崎宿を描く際に、大山・富士ほどの遠景まで画面に組み入れるのは、『分間絵図』の大きな特徴と言えよう。

具体例はこれとどめるが、全体を見渡すと、(a)種の挿絵全五十一図のうち、『玉鉾』二十二図・『分間絵図』二十二図の利用が認められる。すなわち、その八十五パーセント強をこの二書に拠っているということである。⁽¹⁹⁾

前出山本ゆかり氏は、月岡雪鼎の肉筆古典人物画「十二カ月屏風」(滋賀県立琵琶湖文化館蔵)の内の一図と、『名勝志』巻四「二村山」との図様の類似を指摘されている。これは(b)種に属する人物画で、同氏によれば、雪鼎は法眼叙任(安永七(一七七八)年)後に、かかる王朝文化を題材とする人物画を多く描いたという。⁽²⁰⁾さらに、鳥飼醉雅との共同で製作した絵本について、「ひとつには「古典の絵本化」という目的で結ばれていたことが判明する」との指摘があり、本来雪鼎が本領とするのは、こちら(b)の図様であったかと推察できる。すなわち、(a)の絵に多くの典拠が存在するのは、人物画を得意とするゆえに、遠景の、しかも実在する特定の地域の描写には、具体的な粉本を要したということを意味するのかもしれない。

(2) 本文の典拠

これまで見てきたように、『名勝志』の本分は絵にあつて、名所・歌枕ごとの解説は副次的なものに過ぎない。しかし、その微々たる地誌的記述や引用される証歌にも、挿絵と同様に明確な典拠が存在する。

まずは図1にも掲げた松前の記述を見てみよう(表1)。内容を比較してみれば、『玉鉾』では別項にされている「外の浜」の内容を、「松前」に取り込むなどの小さな改変は見られるものの、本文においても、『名勝志』が『玉鉾』を剽窃のごとき態度で利用しているのは明白である(異同の意味については後述)。現段階で、ほぼ全文または一部の『玉鉾』利用を指摘しうるのは、総項目数約一〇六のおよそ三〇パーセントに及んでいる。

その利用は『玉鉾』にとどまらず、菊本賀保の著作にかかると『和国花万葉記』(横本十四卷二十一冊、元禄十(一六九七)

年大坂雁金屋庄兵衛ほか板、以下「万葉記」と略記⁽²⁾も同様の頻度で利用される。夙に指摘されるように、『万葉記』は『玉鉾』・『日本鹿子』（磯貝舟也著、元禄四刊）などの、先行する全国地誌の影響を強く受けているため、『名勝志』がいずれを引用しているのかの判断には慎重でなければならぬが、例えば現宮城県歌枕「緒絶の橋」の箇所を比較するに（表1

『玉鉾』卷一	『名勝志』卷一
<p>○松前^{まつまへ} 松前志摩守殿城下</p> <p>上の国餌指^{みそさし}といへる大所有。此嶋より出る名物。</p> <p>蝦狐^{うしこ}の皮 熊^{くま}の皮 豹^{ひょう}鹿^{ろく}膚^ふ</p> <p>あざらし 鷹^{たか} おつとせい</p> <p>鹿^{しか} 三好^{みやう}こかね とゞ</p> <p>鯡^{にしん} 干鮭^{からさけ} 昆布^{こんぶ}</p> <p>鶴^{つる} 白鳥^{はくちう} 雁^{かり}</p> <p>諸国^{しよこく}の商売^{あきびと}人、爰^{こゝ}に渡り、万上方^{ばんじやう}のごとく繁昌^{はんじやう}の大湊^{みなと}也。浦^{うら}く^の末^{すえ}は、昆布^{こんぶ}にて茸^{ふきの}軒端^{のきば}の人家^{じんや}も見^みへわたりぬ。是より嶋国^{しまとく}へは番所^{ばんしよ}ありて人の通^{とほ}ひ絶^たたり。</p> <p>○外の浜^{そとのはま}</p> <p>此所^{こゝ}今^{いま}に殺生^{せうじやう}人、獵師^{りやうし}の世^よをわたる業^{わざ}とて幽^{かすか}に住^すまれて物淋^{ものしみ}しき浦^{うら}也。</p>	<p>松前</p> <p>松前志摩守殿御城下。上の国^{くに}、餌指^{みそさし}といへる繁花^{はんくわ}の地^ちあり。此所</p> <p>より出る名産^{めいさん}、</p> <p>蝦狐^{うしこ}皮^{かわ} 熊^{くま}皮^{かわ} 鷹^{たか}</p> <p>あざらし 鹿^{しか} 三好^{みやう}こかね</p> <p>おつとせい 鯡^{にしん} 干鮭^{からさけ}</p> <p>昆布^{こんぶ} 鶴^{つる} 白鳥^{はくちう}</p> <p>諸国^{しよこく}の商人^{あきびと}爰^{こゝ}にわたり、繁昌^{はんじやう}の大湊^{みなと}なり。浦^{うら}はく^の賤^{しづ}の家^やは、昆布^{こんぶ}にてふきしのきば見^みへわたり、是より嶋国^{しまとく}へは番所^{ばんしよ}ありて故^{ゆゑ}なくは往還^{ゆきま}かなはず。</p> <p>（「松前」続き）外の浜^{そとのはま}は獵人^{りやうじん}の住^すまれたるさびしき浦^{うら}なり。</p>

2)、証歌を記すのみの『玉銚』に対して、『万葉記』はその別名を示し(傍線 a)、歌語としての用い方(同 b)や本意を説いており(同 c)、それが『名勝志』に文章として再構成されている(『万葉記』傍線 bの空白部分は原文の通り)のは明白である。ただし、証歌(「人こ、ろ…」)は『玉銚』の方に同じだから、ここは『玉銚』と『万葉記』を併用していることが理解される。

続いて引用される証歌について考えたい。『名勝志』に引用される和歌は総計一〇二首で、そのうち七十三首は『玉銚』に一致する。その中には、『玉銚』が表記を誤る歌をそのまま載せているのが十首ほど含まれていて、『玉銚』の利用を裏付ける(出典や作者を明記しないことも踏襲。ただし例外もあり)。

ただ、むしろ興味深いのは、両書間で異同を見出しうる十三首の方で、①『玉銚』の誤りを訂正するもの(五首)・②『名勝志』の方が誤るもの(八首)、に分類される。

表2

『玉銚』巻一	『万葉記』巻十一	『名勝志』巻一
<p>○緒絶橋<small>おだへ</small></p> <p>白玉のをたへのはしの名もつらし乱て 落る袖の涙に 人心をたへの橋に立帰り木葉ふりしく 秋の通路</p>	<p>緒たへの橋</p> <p>とだへの橋共丸木橋共いへり。 名景 東路の みちのくの 白玉の 共よ めり。</p> <p>続後撰 白玉のおだへの橋の名もつら しくだけて落る袖の涙に 定家 とだへ共云によりて、あやうきよしをよめ り。</p>	<p>緒絶の橋<small>おだへ</small></p> <p>人こ、ろおだへのはしに立帰り木<small>こ</small> 葉<small>は</small>ふりしく秋<small>あき</small>のかよひ路 戸<small>と</small>だへのはし共丸木<small>まるき</small>はしともよめり。 東路<small>あづまぢ</small>のとだへ、白玉<small>しらたま</small>のをだへ、みちのく のとだへとも。いづれもあやうきさまを よめり。</p>

白妙しろたへの富士ふしの高根たかに月寒つきさへてこほりをしける浮島うきしまがはら

右の歌は、『名勝志』巻三「浮島原」に引かれる前者の例。『新拾遺和歌集』（二条為明・頓阿編、貞治三（一三六四）成）を『出典とする源有長による歌で、『玉銚』は初句を「白砂の」（傍点論者）に誤るのを、『名勝志』は訂正した上で引用している。

一方、②の八首中六首は、何に拠った結果誤ったのか不明ながら、残る二首は『万葉記』の記載を採用したために誤ってしまっている。すなわち、表3の二首は、それぞれ1が『金槐和歌集』（鎌倉時代成）、2が『名所方角抄』（近世初期成、小本一冊、寛文六（一六六六）年、京都谷岡七左衛門板）を出典とし、いずれも『玉銚』は正確に引いているにもかかわらず、『名勝志』の引用は『万葉記』の表記に一致し（傍線部）、同書を机辺に置いていた証左となる。

そのほか、一部には『名所方角抄』（以下、『方角抄』と略記）からの引き写しと思われるケースも指摘できる。表4は、先引『名勝志』巻四「菊川」（現静岡県）の本文部分である。同所は『玉銚』にも立項されるが、表3に挙げた歌とともに、「此所に矢の根鍛冶ねかぢの名人有めいじん。また切飴きりあめの名物有」という解説が付されるのみで、『名勝志』との共通要素が少ない。従っ

表3

	『玉銚』	『万葉記』	『名勝志』
1	武士の矢なみつくろふ小手の上に 丸雪たはしる那須 <small>なすの</small> のしの原 (巻一「〇那須野」)	武士の矢なみつくろふ小手の上に 霰たばしるなすのさ、はら (巻十一「殺生石」)	武士 <small>もの</small> の矢 <small>や</small> なみつくろふ小手 <small>うへ</small> に あられたばしるなすのさ、はら (巻二「那須野」)
2	わすれめや軒 <small>の</small> 萱 <small>ま</small> に雨もりて 袖引かぬる菊川 <small>の</small> 宿 (巻三「〇菊川」)	忘れめや萱 <small>が</small> 軒 <small>ば</small> に雨もりて 袖引かぬる菊川 <small>の</small> 宿 (巻八「菊川」)	わすれめや萱 <small>か</small> 軒 <small>端</small> に <small>あ</small> めもりて 袖 <small>ひ</small> きかぬる菊川 <small>の</small> 宿 (巻四「金谷・菊川」)

て、『万葉記』のみを比較対象とする。

一部『万葉記』・『方角抄』双方に見られる表現も存する⁽²⁴⁾けれども、「宿在之」のような字句の共通に明らかなように、歴史故事に終始する『万葉記』⁽²⁵⁾でなく、『方角抄』(増補版)の地誌的記述を採用したのは確実と言えよう。ただし、先述の通り証歌は『万葉記』に拠っており、編者が複数の資料をかなり意識的に使い分けている様子が窺われる。今のところ『方角抄』の利用が確認できるのは、ほかに「小夜の中山」・「浜名の橋」・「白須賀」(以上巻四)、「笠寺」(巻五)など。

表4

『万葉記』巻八	『方角抄』	『名勝志』巻四
<p>菊川 さよの山、東の麓。日坂の宿より東也。海道也。むかし、承久の合戦のとき、院宣かきし咎により光親卿関東へ召とられ、此所に誅せられ給ひし時、昔、南陽県菊水、下流延壽、今、東海道の菊川、添西岸終命、かやうに作りて、白刃の下に空敷成給へり。忘れめや萱が軒ばに雨もりて袖引かぬる菊川の宿</p>	<p>菊川 さよの山のひかしの禁なり。宿在之。川は北より南へなかれたり。ほそき川なり。忘れめや軒の萱かまに雨もりて袖引かぬる菊川の宿 又、海道には名所おほくあれ共、其在所不明。(以下略)</p>	<p>金谷 菊川 忘れめや萱か軒端にあめもりて袖ひきかぬる菊川の宿 菊川、さよの山の東の麓なり。宿在之。川は北より南へなかれたり。細き川也。又、街道に名所多くあれども、その在所さだかならず。</p>

合計	巻五	巻四	巻三	巻二	巻一	歌数
102	17	25	19	15	26	『玉鉾』に見えない歌
29	9	10	4	2	4	『万葉記』
3	0	1	1	0	1	『方角抄』
2	0	0	2	0	0	『吾妻紀行』
18	9	7	0	2	0	

表5

以上をまとめると、宝暦期の名所絵本たる『東国名勝志』は、いずれも元禄年間刊行の日本地誌・東海道の道中絵図、および寛文頃出版の連歌用語集に依拠して成立していることになる。基本的に証歌・絵ともに『玉鉾』を主要典拠としつつ、足らざるを『万葉記』や『方角抄』で補うという傾向がある。

ただ、巻四・五と進むにつれ、証歌が『玉鉾』・『万葉記』を拠り所としない項目が増えるが、それは、所謂伝統的な歌枕の項目が減り、それ以外の新しい名所項目が増すためだと思われる。典拠の一つたる『玉鉾』も、東海道の同地域には、そもそも証歌を伴わない項目が多いのである。

『名勝志』編者は、その証歌の不足を補うために、さらに別の資料を用意した。これまた元禄期に公刊された、俳人谷口重以著『吾妻紀行』（半紙本三巻三冊、元禄四（一六九一）年、京都吉文字屋市郎兵衛・江戸同三郎兵衛・大坂同伝兵衛・京都笠

馬市十郎板）である。表5をご覧い

ただきたい。これは『名勝志』引用歌の依拠資料とその歌数をまとめたもので、これを見ると、『名勝志』に見える証歌のうち『玉鉾』に確認できないのが二十九首あり、前述の通り巻四・五に集中している、その多くが『吾妻紀行』に見出されることがわかる。すなわち、同書が引用する、主に近世歌人による作品が、その不足分を補って

いるわけである。具体的には、烏丸光広（「石薬師」・「蟹が坂」・「石部」）、沢庵（「赤坂」・「石薬師」）、遊行四十二代尊任（「品川」）。元政（「桑名」）らの和歌・狂歌がそれに当たると。

これで主たる依拠資料を明らかにしえたわけだが、『吾妻紀行』の板元が「吉文字屋市郎兵衛」なる書肆であることは興味深い。実際の関係は不明だけれども、後述するように、『名勝志』は、吉文字屋の積極的な営業活動の成果と言うことができ、「市郎兵衛」が系列を同じくするのであれば、これもその一例となるわけである。

四 受容態度と「東国」認識

それでは、編者はいかなる態度でこれら先行作を受容したのであるうか。特に巻一の蝦夷・陸奥部分について、『玉鉾』との関係に限定して検証しつつ、そこから導き出される「東国」観についても一言しておく。

(1) 継承する要素

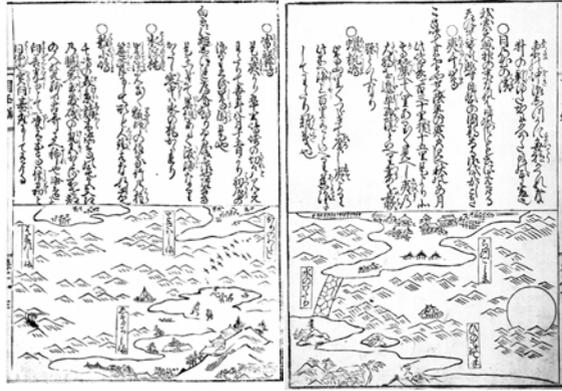
図6はそれぞれの本文冒頭部である。両書ともに最初の項目を「日の出の浜」としており、他の文献や地図類に見出し難いこの地名・地域名の共通と、それを冒頭に配する構造こそが、そもそも『名勝志』の『玉鉾』利用を裏付けている（『日本鹿子』・『国花万葉記』とも山城国を初発とする）。『玉鉾』が証歌として、

我国は天照神の末なれば日の本としも云にそ有ける

天津空替らす照す日の本の国静なる御代そかしこき

という二首を挙げることから、「日の出の浜」は「日の本」（太字部分）に通じる名称と察せられるが、これについては、中世後期の「日のもと」の呼称を、「津軽から「えぞが島」の南端にいたる地域、かつての日本国の東の境界、外が浜、「えぞが島」の範囲をさすもの」⁽²⁸⁾かと分析された大石直正氏の説を受けて、浅倉有子氏が、

図6 本文冒頭
『玉銚』巻一



『名勝志』巻一



(論者注)『玉銚』の)日の出の浜は日の本に通じ、大石直正氏らによって明らかにされた、中世後期における日本の東の境界という認識を反映したものと考えられる。⁽³⁰⁾

と指摘される。

また、そのような「東の果て」という境界領域としての意味とともに、平林香織氏が言われるように、『玉銚』全体の、日本の国土を意識した構成の導入という意味もあるだろう。同氏はその首尾一貫した姿勢(序文書き出し「久かたの日本」と巻四末

尾「久かたの入日」を重視し、強い国家意識の表れを指摘される。⁽³¹⁾『名勝志』も、意識的にはないにせよ、その「東国」を始原とするかのごとき国土観のにじむ導入を、引き継いでいることになる。

以下、この箇所では「蠟狐嶋」「常盤嶋」が『名勝志』にも、図様のみではあるが、継承される。前者は『大日本地名辞書』

をはじめ諸氏によって得撫島(千島列島の二)に比定され、⁽³²⁾ 実在の島とされる一方、後者「常盤嶋」は架空の土地であり、『玉鉾』は「毎年八月十五日より初雁の渡りくる島国是也」と解説している。これは、十四世紀初頭の日本図に初出と言われる「雁道」なる、やはり伝説的な土地(異類異形の住処という)と関連しよう。

すなわち、中世から近世前期までの日本図にしばしば見られる、所謂女人島や小人島といった架空の島々と同種の「常盤嶋」や、かつての人々が東方に抱いた興味やエキゾチシズムを色濃く残す「日の出の浜」という地名を引き継ぐことによって、『玉鉾』に示された古代・中世以来の辺境・境界としての東国認識を、『名勝志』ははからずも伝播させることになったと言えるだろう。

(2) 捨象された要素

しかし、その全てを受け入れたのではない。『名勝志』があえて改変や削除を行った事例も散見するのである。

まず、図様について見ると、『玉鉾』では「まつまへ」が独立した土地に描かれ、蝦夷地たる「ゑそかちしま」と分離してしまっているのに対し、『名勝志』は、松前の後方に、明記はしないものの、明らかに蝦夷地と思われる地続きの大きな土地を描き込んでいる。刊行日本図において、十七世紀後半から十八世紀にかけて、〈夷狄〉≡〈蝦夷地〉と松前を陸続きに描くものと、松前を島として表現するものが併存していたことが、米家志乃布氏によって明らかにされており、⁽³⁴⁾ 『名勝志』の図様はその一典型を示すことができる。

刊行日本図に見える蝦夷地の地域情報は、時代が下るに比例して正確・詳細となるとは一概に言えない⁽³⁵⁾ という。しかし、松前を狭小な島のように描かなかつたことにより、結果的には『玉鉾』の表現よりも『名勝志』の方が正確⁽³⁶⁾ になっている。民間の北方図では、『和漢三才図会』巻六十四所載の「蝦夷之図」⁽³⁷⁾ が、十八世紀広範に流布し、強い影響力を有していたと指摘される。現北海道部分を南北に縦長に描写し、松前のある前方部分(渡島半島)を小さく、後方をそれよりも大きく描く形状や、東方に架空の島を配して、北方に大陸の一部(『名勝志』では「高麗」)を置くという諸特徴から、『名勝

志』もその系統に連なるものと言える。

ただし、北構保男氏によると、この『名勝志』の蝦夷・松前の図様に酷似するものが、既に寛延四／宝暦元（一七五二）年刊『増補海陸行程細見記』（鳥飼醉雅編・刊、以下「海陸」）に見られるだけでなく、上方の民間地図作者たる森幸安作の写図『蝦夷之畧図』（元文二（一七三七）成）にも写されているという⁽³⁷⁾。要するに、この鳥瞰図は、宝暦前後に鳥飼醉雅によって、あらかじめ道中記のために考案されていた図様と言うことができる。

いづれにせよ、幕府による探検調査（天明五（一七八五）～同六年）で得られた情報が反映された、長久保赤水「蝦夷松前図」（寛政七（一七九五）頃刊）が現れるまでは、この縦長描写が一般的であったわけで、『名勝志』などの蝦夷地表象も、当時の民間の地理認識をいささかも超えるものではなかったと指摘できる。

『玉鉾』との比較に戻ろう。『玉鉾』では「らつこしま」から「ゑそかちしま」に架かる「氷のわたり」なる橋や、先述の「ときはしま」から飛来したと思われる雁の群れ（「かりのわたし」）が描き込まれている（図6）が、これらの多分に伝承的、実在とは考え難い要素を、『名勝志』では全て取り払っている（「常盤嶋」にしても所付のみで解説はしない）。特に着目すべきは、『玉鉾』には「日の本」の明確な表徴として描かれていた日輪が姿を消し、「夷千嶋」の一部として実在するかのよう「明示されていた「日の出の浜」も、具体的な場所の特定はなされないことである。前掲『海陸』もほぼ同様だけれども、同資料には、『玉鉾』にも無い、「日の出の浜」の地名としての注記が見られるのに対し、『名勝志』はそれをも削除している。

これは、「そのはま」に描かれていた、同地を舞台とする謡曲「善知鳥」の詞章によるであろう、二羽の鳥（うとう・やすかた）の絵を削除し、同所の解説から「殺生人」という猟師の形容句を割愛したことと同じく、不確実な情報を排除しようという意図による処置と指摘できよう。

自らの作品に一度は「常盤嶋」を描き加えた先の森幸安も、宝暦二年の段階ではこれを「世諺之処区」（『日本志地図附

外国蝦夷州地図』注記」と認識し採用しなくなる。⁽³⁸⁾宝暦年間にはかかる合理精神が生まれていたのであり、ここに元禄期の『玉銚』との地理認識の明確な相違が見られる。

五 『東国名勝志』とその時代

さて、ここまで『東国名勝志』の成立に、『一目玉銚』や『東海道分間絵図』などの元禄時代の地誌類が深く関わっていたことを、図様の相似や文章表現の部分的な一致を根拠として述べてきた。

ここでは、それを補強すべく、編者・刊行者たる吉文字屋市兵衛（定栄堂）の活動に着目して、このような作品が宝暦期に編纂された背景を探りたい。

まず指摘すべきは、定栄堂が『玉銚』の板木を購入していることであろう。既に『定本西鶴全集』第九卷（頼原退蔵ほか編、中央公論社、一九五一年十一月）解題・『西鶴』（天理図書館編・発行、一九六五年四月）をはじめ、諸書、奥付に明記のある吉文字屋市兵衛後印本の存在を指摘するほか、時代は下るが、同書肆の寛政期の蔵板目録に登載されており、吉文字屋市兵衛が『玉銚』の板木を所有していたことは確実で、入手時期こそ判然としないけれども、享保三年の年記を有する三都版よりは後と考えられる。そして、その目的の一つは『東国名勝志』の如き、同書を利用した編著の類板訴訟を回避するためであったかと推測される。事実、単純な後刷りのみならず、東海道の部分だけを抜刷りにした改題本『東海道名所図会』（大本二巻一冊、鳥飼少人序、無刊記）の存在もよく知られるところ⁽⁴¹⁾で、その板木所有者としての権限を大いに利用している様子が見てとれる。

かかる商法は、当時の上方文壇の状況を反映していよう。宝暦期の小説界は、浮世草子の最末期に当たり、人間の性質をつぶさに見つめてその類型を写實的に描写した気質物も、題材を広げようとするあまりに、現実感を伴わない人物

ばかりを登場させる悪循環に陥るなど、停滞期を迎えていた。そして、その打破を求めて、西鶴という、人間社会の克明な描写に優れた先達を「発見」したのであった。⁽⁴²⁾ その気運を受けて吉文字屋市兵衛などの有力書肆がとった行動について、中村幸彦氏は、

その定栄堂蔵版目録に「男色大鑑西鶴作全 部八冊 武士形気武道の義ふかき 咄し絵入五冊」とある。「武士形気」は滝田貞治氏が『西鶴裸俎』で紹介された『古今武士形気』。「男色大鑑」の改題である。改題本出版の多い当時でも、特に多くを出した商売上手の定栄堂が、西鶴の作を、もとのままと改題本とを出した所、その計画の奈辺を狙ってかは自ら明かであろう。(中略) なお坊間、間々、『日本永代蔵』『一目玉鉦』『西鶴織留』『諸艶大鑑』等の随分と新しい刷りを見る。これ等の後刷や、滝田氏始め諸氏の紹介された、西鶴の改題本改装本にも宝曆に入ってからのが多いのではないかと思われる。

と指摘する。特に『男色大鑑』の扱い方は『一目玉鉦』のそれと全く同様で興味深い。つまり『名勝志』は、このような西鶴本の再刊・改題本盛行の中で生み出された変種の一つと見なしうるのである。⁽⁴³⁾

そしてまた、吉文字屋が折本の道中案内も多く手がけ、そこに『玉鉦』を利用した蝦夷絵図をしたのは、既に触れた通りで、『名勝志』をその派生と見なすこともできるだろう。絵師との提携も含め、吉文字屋の多分野に涉る積極的な活動が、成立の背後に見えるわけである。

『東海道分間絵図』の利用もおおよそ同様の経緯によると思われる。『東海道名所記／東海道分間絵図』(叢書江戸文庫 50) 解題の諸本調査(佐伯孝弘執筆)を参照してまとめると、刊本は初板本のほか、板木を同じくする元禄三年改修本(書肆変わらず)・同十六(一七〇三)年求板本(万屋清兵衛)・正徳元(一七一)年改修本がある。⁽⁴⁴⁾ ここで注目したいのは、板木を異にする宝暦二年刊の桑楊編『東海道分間絵図』(万屋清兵衛板)である。桑楊と書肆は同一人物で、初板本の絵図を全て描き改め、懐中携行が可能ないように小型の折本に仕立てたもの(同書凡例)。おそらく元禄十六年以降板木を確保していたことによる造本で、本書に江戸吉文字屋次郎兵衛(同市兵衛の江戸出店)単独後印本、さらに吉文字屋

市兵衛を加えた明和九（一七七二）年後印を確認できる。⁽⁴⁵⁾

明証を得ることはできていないけれども、万屋清兵衛から吉文字屋次郎兵衛に板木が移る際、初板本の板木も購入したのではないだろうか。吉文字屋次郎兵衛所有となれば、市兵衛がそれを自作に利用することは容易となろう。⁽⁴⁶⁾ 以上を要するに、書肆の動きを追うことでも、『名勝志』による元禄期の地誌類利用の、高い蓋然性が示されたわけである。⁽⁴⁷⁾

六 その影響

最後に『東国名勝志』の、影響と史的位置付けについて触れておきたい。⁽⁴⁸⁾ 矢守一彦氏の、

携帯用サイズではなく、実用を兼ねながら、おもに觀賞用をねらったという点においても、「一目玉鉦」は「東海道分間絵図」に相通するものがあつたし、さらに名所図会の先蹤としての意義は極めて大きいと思われる。⁽⁴⁹⁾

との言に見られるように、『都名所図会』（秋里籬島著・竹原春朝扇画、安永九（一七八〇）年京都吉野屋為八板）に端を発する一連のシリーズの生命線とも言うべき、写実性の高い連続俯瞰図や鳥瞰図の図様の遠い淵源を、元禄期の『玉鉦』・『分間絵図』に求める説があり、さらに直接的には、正徳・享保にかけて続刊された折本の名所絵、『扶桑名勝図』シリーズとその追随作（橋守国画）⁽⁵⁰⁾ に見える同様の絵画表現が、名所図会シリーズ続刊の「先づれを創つたのはたしかである」との見方が、小野忠重氏によって示されている。⁽⁵¹⁾

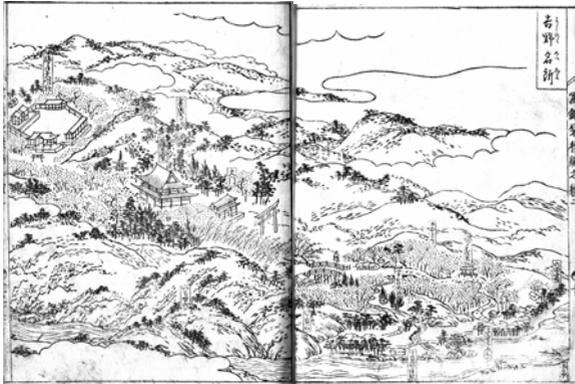
また、夙に仲田勝之助氏も、やはり橋守国（十八世紀前半、大坂で活躍）が手がける、『扶桑名勝図』シリーズと同時期に続刊された一連の絵本類に見られる名所絵を、

初めの方は一頁一圖でなく、つゞき繪で二三頁連續し、師宣の東海道分間絵圖を思はせ、後の『名所圖會』の先をなせるものとして珍重せらるべきかと思はれる。⁽⁵²⁾



(内閣文庫蔵本)

図7 貝原益軒原画『和州芳野山勝景図』
(正徳三(一七一一)刊)



(架蔵本による)

図8 橘守国画『絵本直指玉』
(延享二(一七四五)刊) 卷二)

と評するのである(図7・8参照)。これらを勘案するに、宝暦刊行の『名勝志』は、まさに、絵本と地誌の融合たる名所図会へと連なる、地誌の階梯を示しているとは言えまいか。大本(大ぶりの画面)という体裁、数丁にわたる連続した画面、俯瞰的ないし鳥瞰的視点をもつ遠景図、地誌的解説の付載といった各要素を、『扶桑名勝図』や守国の絵本類から継承することに加え、確認したごとく、そもそも、諸家が名所図会の源流と位置付ける『玉銚』・『分間絵図』を典拠としているのであった。のみならず、これも先に示したが、遠景図だけが連続することを回避するように、近景の人物図が挟み込まれる構成も名所図会の特色と一致をみる。近世の刊行地誌・絵本における俯瞰図・鳥瞰図の展開史において、『名勝志』が名所図会シリーズに先駆ける性質

を有していたことは明らかだと見えよう。⁽⁵⁴⁾

そして、附言するならば、『名勝志』の北方図の形状は、近世の鳥瞰図作品を代表する作者、歙形蕙斎の「日本名所の絵」（木版多色刷、近世後期刊、図10）中にも見出すことが可能である。

既述のように、この図様は先行する道中記付載のものと同じであり、さらに『名勝志』の図様を抽出して使用した『大日本道中行程細見記大全』⁽⁵⁶⁾（図9）のごとき資料も確認でき、直ちに、蕙斎が『名勝志』を利用したと言いうことはできない。ただ、吉文字屋市兵衛周辺で創出された、『名勝志』に描かれたのと同様の鳥瞰図的図様が、当代の第一人者の、それも「日本」を一望のもとに捉えた作品に見られるのは、それに類似する発想による地誌『一目玉銚』を背景にもつ『名勝志』の描写の、鳥瞰図史上の位置を考える上でも、極めて興味深い。⁽⁵⁷⁾

七 結語

以上、名所絵本・地誌『東国名勝志』は、その多くを元禄期の地誌・絵図・紀行に負っていたことが明らかになった。とりわけ『一目玉銚』との関係は重要であろう。八木敬一氏の指摘（『藤栗毛』への影響）を考慮すれば、井原西鶴がかつて抱いた視覚的・地理的なイメージが、長きにわたって伝播・流布する一助となったと言いうことができるからである。しかし、詳細に比較すれば、『玉銚』の画中に見られた説話的記号は削除され、非合理的な側面は巧みに臙化されており、享保以後の学問姿勢、すなわち客観的事実を重んじる考証的な態度が育まれていた時代性を読み取ることもまた可能なのである。

そして視点を転ずるならば、西鶴本の文学史における命脈を考える上でも極めて貴重な資料と言いうことができる。『玉銚』は宝暦期に至っても後印本が商品価値を保ち、『名勝志』のように他書の血肉となつて、新たな姿を得ることのできる



『名勝志』巻一、冒頭

図9 鳥飼醉雅著『大日本道中行程細見記大全』
(多色刷折本一帖、寛政七(一七九五)刊)



(内閣文庫蔵本)



図10 歙形憲斎画「日本名所の絵」
(木版多色刷、近世後期刊、三井文庫蔵)



下は一部拡大

〔特別展 地図と風景―絵のような地図、地図のような絵―〕
〔神戸市立博物館、二〇〇〇年三月〕より転載)

続けただけでなく、『東海道名所図会』（寛政七刊）などという、明らかに名所図会シリーズの好評に便乗する書名を与えられて命を保っていた。

また、さらに一言すれば、天保年間、十九世紀に至っても、『日本海陸道中図会』（大本四卷四冊、新たな序跋などは加えられない）という名でお流布していたのである。既に『加州大学バークレー校所蔵 江戸版本書目』（書誌書目シリーズ29）（岡雅彦ほか編、ゆまに書房、一九九〇年三月）に登載され、周知のことに属しようが、念のため特記する。同目録に見えるのも、論者が寓目したのも、ともに秋田屋良介ほかの刊記（天保三（一八三二）年）を有する。実見したのは岡山大学附属中央図書館池田家文庫蔵本で、「潜龍溪精造」と記される見返しが加えられるほか、その表紙・題簽の意匠（湊鼠色表紙・浅黄色題簽）は、露骨なまでに名所図会を模したものとなっている（図11）。「板木総目録株帳」（文化九（一八一二）改正）には蔵板者として「吉市」の名が登録されるから、当初この改題本を企てたのもまた、吉文字屋市兵衛であった可能性が高い。

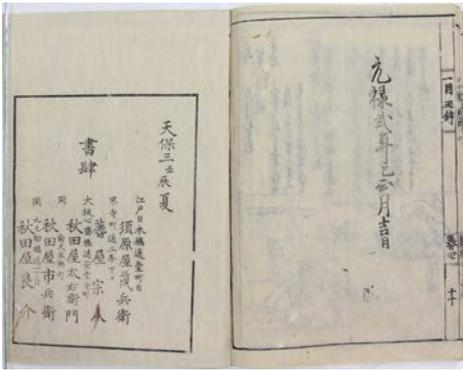
地誌としての正確性への疑問から、とかく評価の低い『玉鉾』だけでも、吉文字屋による元禄地誌をめぐる改題と再構成の様相は、西鶴の編纂した地誌の、日本全国を「一目」で俯瞰的に把握しようという姿勢が、いかに斬新で魅力的なものであったかを示している。改題本の名称が図らずも示唆するように、その発想は後年の名所図会へと展開してゆくのであり、言わばその過渡期の姿を示す『名勝志』は、その水脈を明確に証する存在と位置付けられよう。

ただし、細密な挿絵を用いたものの、元禄期の編纂物に依拠したために、『名勝志』もまた正確な描写を徹底したことにはならなかった。⁽⁹⁾それは後代の名所図会シリーズに及ばない点である。それでもなお本書が一定の存在感を示し得たのは、『玉鉾』がそうであるように、日本の北辺から東国にかけての地域の絵図を有するからだろう。地誌・道中記ともに同地域を対象としたものは少なく、まして俯瞰図・鳥瞰図のごときは、松島・出羽三山を除いては皆無に等しい（東北地方を対象とした刊行名所図会はない）。特に蝦夷地・松前については、松前藩の隠蔽体質もあって、十八世紀末に至る

図11 『日本海陸道中図会』（大本四冊、天保三（一八三二）刊）
表紙
見返し・奥付



（いずれも岡山大学附属図書館池田
家文庫蔵本）



まで情報が限定的であった。『名勝志』は、いくらかでもその渴を癒すもので、明和・安永頃からにわかに活発となる、ロシアに対する危機意識とそれに伴う北辺への地理的興味によっても、その人気を支えられたものと想像される。

機を見るに敏な吉文字屋市兵衛は、自身の有する、あるいは影響下にある板木（『玉鐙』・『分間絵図』・『吾妻紀行』）を大いに利用して、巧みにかかる文学史上重要な一書を成したのであった。今後は、近世地誌編纂史における同書肆の果たした役割についても検討を加えたい。⁽¹⁾

注

- (1) 朝倉治彦監修、角川書店、一九八七年七月。
- (2) 新典社叢書14、佐佐木忠慧編、新典社、一九八七年五月。
- (3) 「鳥飼」は吉文字屋市兵衛の姓。「開板御願書扣」第十三冊に、刊行の前年「宝曆

十一巳年三月」に「開板人」の「吉文字屋市兵衛」によって届が出されているのが確認できる（大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』第十六卷（清文堂出版、一九九一年三月））。『改訂近世書林板元総覧』（日本書誌学大系76）（井上隆明著、青裳堂書店、一九九八年二月）によると、高田清兵衛は大坂順慶町辻井戸北の書肆。渋川清右衛門は都賀庭鐘の主力板元であった。柏原屋清右衛門（渋川氏）のことと思われる。

(4) 以上は、内閣文庫の三本（請求記号一七二—八九・一七二—九〇・一七二—九一）・都立中央図書館東京誌料蔵本（請求記号九四〇五）も同様。三康図書館蔵本（請求記号八一—一五）は、奥付の「寶曆十二」に入木して「寶曆十三」とした後印本。

(5) 『大坂本屋仲間記録』第十二卷（一九八八年三月）。同資料には板株所有者として、吉文字屋市兵衛・柏原屋清右衛門のほか「柏与」（柏原屋与市か同与左衛門か）・「塩平」（塩屋平助か）・「河太」（河内屋太助か）の名が見える。

(6) 『大坂本屋仲間記録』第十三卷（一九八七年三月）。吉文字屋のほか「柏与」・「塩平」も消える。後年吉文字屋は同書肆に全ての板木を譲渡する（天保六（一八三五）年、「裁配帳」四番（『大坂本屋仲間記録』第九卷、一九八二年三月）による）ので、これはその先蹤と言える事態かもしれない。

(7) 内閣文庫蔵本による。以下同じ。

(8) 『日本古典文学大辞典』第二卷（岩波書店、一九八四年一月）「吉文字屋市兵衛」の項（多治比郁夫執筆・浜田啓介「吉文字屋本の作者に関する研究——奥路・其鳳同一人の説等——」（京都大学国文学会編「国語国文」第三十六卷第一号（中央図書出版社、一九六七年十一月二十五日）・尾上和也「大坂書肆の往来物出版活動——吉文字屋・塩屋一族を中心に——」（日下幸男編『文庫及び書肆の研究』、龍谷大学文学部日下研究室、二〇〇八年三月）など。

(9) 山本ゆかり「月岡雪鼎の版本製作」（初出「月岡雪鼎と絵本——祐信模倣から画風の確立まで——」（『江戸の絵本』、八木書店、二〇一〇年）。その後、同氏著『上方風俗画の研究——西川祐信・月岡雪鼎を中心に——』（藝華書院、二〇一〇年四月）に所収。先の引用も同じ。

(10) 「東海道中膝栗毛の挿絵資料について」（『書誌学月報』第三五号（青裳堂書店、一九八八年三月））。内容については後述。

(11) 北構保男「宇木堂・森幸安作「蝦夷之畧図」考」（倉谷一男編『北海道の文化』第66号（北海道文化財保護協会、一九九四年二月））。

(12) 『名勝志』挿絵の種別と点数を一覧にすれば左記の通り。

計	(b)	(a)	卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	総計		
			15	2	13	15	8		7	8
15	7	8	19	7	7	6	17	81	30	51

(13) 『玉銚』は、小池章太郎ほか解説『近世文学資料類従』西鶴編22(勉誠社、一九七五年五月)、『名勝志』は、国立公文書館内閣文庫蔵本(一七二―一七八)による(以下同じ)。

(14) 南部利昭監修
編井計編『奥州道中増補行程記』(新南部叢書特装版)(東洋書院、一九九九年一月)による。後掲図版も同じ。

(15) 『分間絵図』は、国立国会図書館蔵本(寄別五―四―三一六)による(同館デジタルコレクション、以下同じ)。

(16) 深井甚三著『岡翁遠近道印 元禄の絵地図作者』(桂書房、一九九〇年五月)。

(17) 『玉銚』のほか、同時期の全国地誌『日本鹿子』(磯貝舟也著、元禄四刊)・『本国花万葉記』(菊本賀保著、元禄十年五月刊)も同所に大橋ありとするが、『日本鹿子』の後編『本朝丸鑑』(桃隣堂著、元禄十年三月刊)巻三に載る道中絵図には、橋の絵は無く「今は舟わたし」と注記する。同資料は江戸板ゆえに、先行する『国花万葉記』(大坂板)よりも正確であったか。

(18) 山本光正著『街道絵図の成立と展開』(臨川書店、二〇〇六年六月)・今井金吾監修『道中記集成』全四十四巻(大空社、一九九六年六月―一九九八年七月)による。なお、山本氏によれば、完成度の高い『分間絵図』以降、幕末に至るまで見るべき街道絵図は刊行されなかったという。

(19) なお、各巻の典拠利用の内訳は左記の通り。

『分間絵図』	『玉銚』	卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	合計
		0	13	3	6	7	
		1	3	2	3	22	

- (20) 「古典人物画製作とその背景」(前掲『上方風俗画の研究』所収。初出は「月岡雪鼎試論——古典をめぐる絵画制作の再検討」〔美術史〕一五五冊、美術史学会、二〇〇三年十月)。
- (21) 同注9。
- (22) 引用は全て朝倉治彦監修『国花万葉記』四(古板地誌叢書4)(すみや書房、一九七一年一月)による。
- (23) 『方角抄』の引用は、架蔵の「増補名所方角抄」(宝永四(一七〇七)刊)による。野中春水氏によると、『方角抄』は谷岡板(甲類)ほか、三系統に大別され、増補版(寛文十二刊)はこのうち甲類に属するもの、かなりの誤脱・異同が見られるという(「名所方角抄雑考」〔武庫川国文〕第十七号、武庫川女子大学国文学会、一九八〇年三月十五日)。引用部の「宿在之」は、原板では「宿在也」となっており(同氏「対校「名所方角抄」上」〔武庫川国文〕第二十九号、一九八七年三月十三日)、『名勝志』は増補版を参照した可能性が高い。
- (24) これは『万葉記』自体が『方角抄』の影響を強く受けているためと考えられる。
- (25) 承久の乱時のエピソードだが、ここに引用される詩を成したのは藤原光親でなく、宗行とするのが正しい。
- (26) 『吾妻紀行』は柿衛文庫蔵本マイクロフィルムによった。
- (27) 鳥飼醉雅による道中記の類本のはかは、高野幽山著『和歌名所追考』(延宝元(一六七三)頃成、元禄九(一六九六)頃改訂)巻一一〇に立項されるのを知るのみ。同書は従来の歌枕以外の名所も採録した名所和歌集。
- (28) 前者は藤原良経作、『玉葉和歌集』(京極為兼撰、正和元(一一三二)成)などに収録。後者は藤原知家作、『新撰六帖』(寛元二(一一四四)成か)などに収録。
- (29) 大石直正「中世の奥羽と北海道——「えぞ」と「日のもと」——」(北海道・東北史研究会編『北からの日本史』「函館シンポジウム」〔三省堂、一九八八年五月〕)。
- (30) 浅倉有子「蝦夷認識の形成——とくに契機としての情報をめぐって——」(同氏著『北方史と近世社会』(清文堂出版、一九九九年二月))。
- (31) 「西鶴の地域意識」(『岩手医科大学教養教育研究年報』第四九号(岩手医科大学教養教育センター、二〇一四年十二月二十五日))。なお、『日本鹿子』・『国花万葉記』のどちらもそのような構成をとらない。
- (32) 吉田東伍著『増補版 大日本地名辞書』第八卷(富山房、一九八五年五月)のほか、野田寿雄「一目玉粹」と北海道」(『武

- 蔵野文学」15（武蔵野書院、一九六八年）・秋月俊幸著『日本北辺の探検と地図の歴史』（北海道大学図書刊行会、一九九九年七月）などを参照。
- (33) 青山宏夫「古地図に描かれた想像世界」（『日本史と環境——人と自然——』（環境の日本史1）（吉川弘文館、二〇一二年十一月）。
- (34) 米家志乃布「地図から見る近世日本意識の変遷と「蝦夷地」（『法政大学国際日本学研究所編「国際日本学」第9号（法政大学国際日本学研究センター、二〇一二年三月三十日）・同氏「近世日本図の北辺・「蝦夷地」表象」（吉田裕編「文学」第十六巻第六号（岩波書店、二〇一五年十二月二十五日）。
- (35) 同注34。
- (36) 注32『日本北辺の探検と地図の歴史』による。『津軽一統志』（享保十六（一七三二）成）や『塩尻』（天野信景著、元禄享保年間）所収のものも同系統という。
- (37) 同注11。前述の通り、同氏はこれを『玉鉾』の影響下にあるものとされるが、『名勝志』の直接の依拠資料をその道中記とすることはできない。道中記類には『玉鉾』・『名勝志』に共通する証歌（先引「天津空……」など）を載せず、列挙される松前の名物にしても、『玉鉾』をそのまま写し、『名勝志』とは一致しない。なお、幸安の写図の成立年から、同氏はこの道中記の原刊を、享保頃と推定されている。
- (38) 同注11北構氏稿による。
- (39) 実物は未見。ただし、同書肆の蔵版目録を付した無刊記本は確認できる（国文学研究資料館蔵本ほか）。
- (40) 寛政年間（一七八九—一八〇一）刊行の、菊岡沾涼による道中案内を増補した『改正日本道中行程記』に付載（東京都立中央図書館加賀文庫蔵本による）。
- (41) 書名は内題による。外題は「東海道名跡図会」。「開板御願書扣」第二十二冊（『大坂本屋仲間記録』第十七巻）によると寛政七年八月許可。「板木総目録株帳」（寛政二改正）・同（文化九改正）の双方（『大坂本屋仲間記録』第十二・十三巻）に、吉文字屋市兵衛ほかの所有が記録される。
- (42) 中村幸彦「安永天明期に於ける西鶴復興」（『中村幸彦著述集』第五巻〔中央公論社、一九八二年八月〕）。初出は「小説阿蘭陀流」（『京都帝国大学国文学会編「国語国文」第八巻第四号、弘文堂書房、一九三八年四月二十日）。後の引用も同じ。

- (43) 同時期の上方において、西鶴本ならずとも似たような書肆の戦略があったことは、万治二(一六五九)年刊の「万国」を紹介した仮名草子『異国物語』を改題刊行(『異国鑑』)する一方、それに依拠する別本『画本国見山』(初編宝暦七刊、二編明和七(一七七〇)刊)を出版した大坂の書肆千種屋新右衛門の事例が証している(小林ふみ子「近世日本の異国絵本の愉楽と陥穽」〔前掲注34「文学」第十六卷第六号〕。元となる資料の挿絵を用いて、改めて絵本として仕立てるといふ点も見事に一致する。
- (44) 同解題に明記されないが、論者が確認したところ万屋清兵衛の刊記を有する(国立公文書館内閣文庫蔵本による)。
- (45) いずれも逢左文庫尾崎久弥コレクション蔵本(国文学研究資料館マイクロフィルム)による。
- (46) なお、大半は初版本に拠っているけれども、こちらの改訂本の絵図を写したと思しき箇所が二箇所ほど(巻二「金川」・巻四「見附」)ある。
- (47) なお、今のところ『万葉記』・『方角抄』の板株も入手して示す証は得られていない。後考を期したい。
- (48) 先に示した(注10)ように、影響に関しては既に八木敬一氏に指摘があり、十返舎一九作『東海道中膝栗毛』(享和二(一八〇四)文化十一(一八一四)刊)の前半(初編)五編に『名勝志』の挿絵(賛を含む)が利用されている報告がある。
- (49) 矢守一彦「鳥瞰図史考」(同氏「古地図と風景」〔筑摩書房、一九八四年九月〕、初出は「鳥瞰図考」〔京都大学地理学教室編「地理の思想」、地人書房、一九八二年二月〕)。
- (50) 『扶桑名勝図』は、「いわゆる『日本三景』(厳島・天橋立・松島)に吉野山を加えた四名所の詳細な木版手彩色画に、福岡藩儒貝原益軒、仙台藩儒佐久間洞巖らの解説を付したもので、京都の書肆柳枝軒(小川多左衛門)によって、正徳三年から享保十三年に互り刊行されたもの」(川平敏文『勝又基』「扶桑名勝図」考——九大本を中心に——〔其編集部編(兼発行)「文献探究」第36号、一九九八年三月三十一日〕)。この追随作に、橘守国画の『撰津国馬山勝景図』(寛延二(一七四九)刊)がある。
- (51) 小野忠重「名所図というもの」(同氏編『名所遊覧』(日本の古地図⑧)〔講談社、一九七六年十二月〕)。
- (52) 仲田勝之助「絵本の研究」(美術出版社、一九五〇年五月)。かく述べるのは、和漢故事説話の図説『画典通考』(大岡晋斎著、享保十二(一七二七)刊)巻二・三所載の、本邦の風景についてで、守国が手がけた絵本は、他にも同様の名所絵を多く含むだけでなく、それに影響を与えたとされる『和朝名勝画譜』(漱石子画、享保十七刊)も同趣向と述べる。なお、『画典通考』以外の三書とも大本。この時期の上方出版界には、既に細密でパノラミックな名所絵が準備されていたのである。

- (53) 前掲仲田氏は、名所図会の特徴の一つとして、「なほ春朝斎は只風景畫のみの單調に流るゝを恐れていくつか隔きに人物の大畫を加へて變化あらしめ」た点を指摘する（同注52）。
- (54) 影印本（注2）解題において、佐佐木忠慧氏も「東海道名所図絵の先蹤の意義のあることも忘れられている」と指摘される。
- (55) 同人の「江戸名所の絵」（享和三（一八〇三）刊）をさほど下らぬ時期の刊行とされる（内田欽三「歛形蕙斎筆「江戸一目図屏風」の成立をめぐる」〔サントリー美術館事務局編「サントリー美術館論集」三号、サントリー美術館、一九八八年十二月二十日〕）。
- (56) 鳥飼醉雅著、多色刷折本一帖、寛政七（一七九五）刊。先の『海陸』とは別図。『名勝志』に付される証歌が見え、松前名産の記述が、『玉銚』でなく『名勝志』に一致することから、明確に『名勝志』を利用した図と言えらる。なお、刊年不明ながら、『海陸』の図を多色刷にしたものも存在する（高倉新 郎編『北海道古地図集成』〔北海道出版企画センター、一九八七年九月〕。成田修 一編『蝦夷地図抄』〔沙羅書房、一九八八年十二月〕）。
- (57) そして、それはまた蕙斎の北方の地理的認識も、新しい情報を踏まえたものでなかったことを意味する。
- さらに、「日本名所の絵」の、西方の空に沈みゆく月について、ヘンリー・スミス氏は、やはり蕙斎の鳥瞰図「江戸名所の絵」で描かれる日の出と対応するものと捉え、「つまり蕙斎は、日本列島を昇る朝陽の目で見ていることになる。まさに日本という名前と、この驚嘆すべき絵は一体となったのだ」（鳥瞰図の構造）〔朝日ジャーナル編『大江戸曼陀羅』、朝日新聞社、一九九六年五月〕と指摘されるが、日本全土を上空から一面面に収めた、この画期的な絵図の（鳥瞰図的図様の）歴史的背景の一つである『玉銚』が、「日の出の浜」をその巻頭とすることもまた、非常に興味深い照応と三言うことができるだろう。
- (58) 「潜龍溪」は秋田屋良介の雅号と思われる。秋田屋良介・檜皮屋善作の刊記を有する前出『海陸』後印本（神戸大学附属図書館住田文庫蔵本）に、「大坂書林潜龍溪旅書板行目録」が付載され、潜龍溪編『採葉便利早引和名集』（天保五刊、内藤くすり博物館蔵本）が秋田屋良介板であることが証左となる。
- (59) その典拠たる『玉銚』の改題本二種に加え、図様の共通性が顕著な橋守国の絵本、『本朝画苑』の改題本も『名物詩歌図会』（刊年不明）と名付けられる事実も、『名勝志』が「名所図会」なる発想に連なることを示している。
- (60) 醉雅子の序文は、「一度巻をひらけば宛も面下其地に至れる心地して想像にたへざる也。」と、その刊行意図を述べているが、「多くは假托の圖にして地理に益あるものなし」（問宮士信編『編輯地誌備用典籍解題』（文政六（一八三三）序）第一卷「総記」）などという評価を受けてしまうのである（東京大学史料編纂所編『大日本近世史料』63〔東京大学出版会、一九七二年三月〕）。

(61) 近世地誌作者として重要な位置を占める菊岡沾涼(享保江戸座の俳諧師)の作品を求板していたこと(『藻塩袋』など)や、彼の地誌的な要素を有する諸国説話集の類似作の編纂(拙稿「近世説話の生成一斑——『諸国里人談』・『本朝俗諺志』と地誌——」)〔『成城国文学』25、成城国文学会、二〇〇九年三月二十三日〕などを含め、解明すべき問題は多いが、それについては他日に譲る。

〔付記〕

本稿は、法政大学国際日本学研究所シンポジウム「近世日本における北方イメージ」(二〇一七年七月二十三日、於法政大学)における研究発表「近世中期諸国説話集と「東国」」の一部に基づく拙稿「再生する地誌——『東国名勝志』とその依拠資料をめぐって——」(『京都市立大学文学部編「国語国文」第八十七巻第四号(臨川書店、二〇一八年四月二十五日)』)に、第四七回西鶴研究会(二〇一八年八月二十八日、於清泉女子大学)での研究発表の内容も加えて、大幅な加筆・修正を施したものである。

<ABSTRACT>

Illustrated Guide to Famous Sites *Tōgoku Meishōshi* and Geographical Description in the Genroku Period

MASHIMA Nozomu

Tōgoku Meishōshi (drawn by Tsukioka Settei, five volumes, author's self-preface, no afterwards, and published in 1762), which is an illustrated book series and geographical description edited and published by an Ōsaka bookstore Kichimonjiya Ichibee, takes an important role in a history of geographical descriptions in the Early Modern Age, since it bridges the series "Guide to Famous Sites", de facto monumental achievement of folklore topography in the Edo Period. However, it is clear that many of the pictures and descriptions depend on the geographical description, drawings and travel writings of the Genroku Period. In this paper, we examined changes and development of the geographical descriptions in the Genroku Period focusing on relationships among Ihara Saikaku's *Hitome Tamaboko*, Ochikochi Dōin's *Tōkaidō Bunkenezu*, and Taniguchi Jūi's *Azuma Kikō*, which are the main reliance materials of that time. Further, through the analysis, we discussed one aspect of ordinary people's view against "Tōgoku" (literally eastern area in Japan) and mentioned that such a view aims to recognize unknown spaces rationally while they were still bounded by medieval sense of values. We conclude that *Tōgoku Meishōshi* is an extremely important work in the history of the geographical description of the Early Modern Period positioning in the development of the history of the bird's eye view-like figure of that time.